

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520080

研究課題名（和文）高野山天野社舞楽曼荼羅供に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Fundamental study of Mandala-ku held in Koya-san Amano Shinto shrine

研究代表者

遠藤 徹 (ENDO TORU)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：10313280

研究成果の概要：高野山鎮守天野社（現、丹生都比売神社）で、室町時代中期から江戸時代末期まで継続して行われていた遷宮舞楽曼荼羅供について、前史となる一切経会舞楽を含めた史的展開、江戸期の式次第、出仕者、曲目、音響設計の特徴等を明らかにした。また、高野山東京別院伝来の高野山関連の四枚の古絵図を調査し、景観年代の考証、描かれている事物の比定と解釈等を行い、天野社舞楽の場面が異時同図の技法によること等を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,000,000	0	2,000,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	420,000	3,820,000

研究分野：日本音楽史

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：高野山、天野社、丹生都比売神社、舞楽、曼荼羅供、雅楽、南山進流、遷宮

1. 研究開始当初の背景

高野山鎮守天野社（現在の丹生都比売神社）には、中世の舞楽装束や舞楽面が多数伝来していたことは早くより知られており（現在は金剛峯寺、東京国立博物館等所蔵）、従来の天野社舞楽に関する研究は、これらの伝来品をめぐって進められ、元興寺仏教民俗資料研究所編集・発行『天野社一切経会舞楽装束調査報告書』（1975）、東京国立博物館編『天野社伝来仮面と装束-調査研究報告書「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」』（1992）、京都国立博物館編集・発行『天野社伝来の舞楽装束』（1993）など、詳しい報告書が作成され、一定の成果があげられていた。しかし、これ

ら一連の研究は、伝来品自体の価値に関心が集中する傾向があり、実際に行われた舞楽法要の具体相についてはほとんど研究が及んでいなかった。

天野社の舞楽法要自体を正面から採り上げた従前の唯一の論考は、土生川正道「天野神社に於ける舞楽曼荼羅供寸考」と、それに付随する天野歴史文化保存会編「天野社舞楽曼荼羅供実施年表」（『高野山麓 天野の文化と民俗』1、51頁～57頁、1993）である。土生川氏の論考は、江戸末期の高野山の僧侶側の資料を紹介したものであるが、それに付随する年表では、鎌倉時代から江戸時代末期までに行われた天野社舞楽の歴史が初めて

時系列に則して提示され、十五世紀中葉以来、江戸末期まで、およそ二十年に一回の周期で一貫して舞楽曼茶羅供が行われてきたという事実が示された。しかし年表という性格上、記述は簡単なものに留まり、天野社舞楽曼茶羅供の具体相（次第、出仕者、演目等）の考察には至っていなかった。

なお、広く舞楽法要の研究に目を転ずると、従来の研究は京都周辺や南都の堂塔供養会、四天王寺聖霊会等の四箇法要に比重があり、密立の二箇法要による舞楽法要については、ほとんど考慮されてこなかった。

2. 研究の目的

本研究は、江戸時代末期まで天野社で行われていた舞楽法要の実態を解明し、式次第を天野社固有の会場の空間配置に則して再構成した上で、その音響設計の意図や効果を読み取り、これを音楽史上に位置付けることを目的とする。

数ある舞楽法要の中で、天野社の舞楽曼茶羅供に注目するのは次の理由による。

(1) 享徳元年(1452)より、天保十年(1839)に至る四百年にも及ぶ期間、およそ二十年毎の遷宮に際して継続して行われていたこと。

(その前史には鎌倉時代にはじまる一切経会の舞楽法要があり、天野社舞楽は六百年を超える歴史を有する。)

(2) 上述の歴史があるにも関わらず、明治期の神仏分離以降断絶したため、現在ではすっかり忘却されてしまっていること。

(3) 出仕したのは高野山の僧侶、天王寺伶人(中世)あるいは三方(京都、南都、天王寺)伶人(近世)で、声明・雅楽ともに当時最高レベルのものの一であったと思われること。

(4) 高野山は、明治以前は歌舞音曲が禁止されていたため、高野山の南山進流声明は雅楽と接点を持たなかったと考えられがちであったが、実際には天野社で継続的に接点を持っていた。したがって天野社舞楽曼茶羅供の内実を解明することは南山進流声明の従来知られていない一面を照射することにつながる。

(5) 従来の舞楽法要の研究が主として顕立の四箇法要に立脚していたのに対し、密立の二箇法要による舞楽法要であること。

(6) 神前で行われたものであり、神・仏・舞の三者が不可欠の要素として機能する、神仏習合時代の宗教儀礼の一典型と目されること。

3. 研究の方法

研究は、(1) 関連資料の調査収集、(2) 収集した資料の解読と分析、(3) 次第の再

構成と音響設計の意図や効果の解明、(4) 史的展開の解明、からなる。

(1) 天野社舞楽曼茶羅供は、天野社の遷宮の折りに、高野山僧侶と三方楽所の伶人(中世は天王寺伶人)の出仕によって営まれた。そのため史料の調査収集は、丹生都比売神社をはじめ、高野山や楽家伝来の史料を中心に行った。主要な実地調査の概要は下記のとおりである(調査順)。

①香川県立歴史博物館、善通寺(2006年5月)「特別展 善通寺」および史料調査。

②高野山大学図書館(2006年9月、2008年10月)史料調査。

③高野山霊宝館(2006年9月)

天野社舞楽曼茶羅供荘厳図の調査、撮影。

④高野山庭儀大曼茶羅供(2007年4月)

大曼茶羅供の現況調査。

⑤高野山東京別院(2007年12月)

四枚の古絵図の調査、撮影。

⑥国立歴史民俗博物館(2008年7月)

南都楽家、辻家伝来文書の調査、撮影。

⑦丹生都比売神社(2008年9月)

境内の計測、太鼓の調査等。

⑧和歌山県立文書館(2008年10月)

史料調査。

⑨和歌山県立博物館(2008年10月)

丹生都比売神社伝来の鉦鼓縁、鼓の調査、撮影。

⑩国文学研究資料館(2008年11月)

慈尊院中橋家文書の調査、撮影。

⑪宮内庁楽部(2008年12月)

大鉦鼓の調査、撮影。

(2) 収集した資料の解読と分析

収集した史料は、高野山僧侶側からみたもの、天野社神官側からみたもの、伶人側からみたものに大別され、形態上は、文献史料と図像史料に大別される。研究分担者、研究協力者等とともに月1回程度の割合で研究会を開催し、これらを順次解読分析し、さらに総合させた上で(3)(4)の課題を追究した。

(3) 次第の再構成と音響設計の意図や効果の解明

「天野舞楽曼茶羅供宝永之記」(善通寺蔵を中心に、「天野社舞楽曼茶羅供荘厳図」(金剛峯寺蔵)「天野宮舞楽導師作法」「天野宮舞楽行壇法則」(高野山大学蔵)等の高野山僧侶側の史料、丹生家文書等の天野社神官側の史料、「四天王寺楽人林家楽書類 禁裏東武並寺社舞楽之記」(京都大学附属図書館蔵)、「楽所録 諸願並諸雑記」(国会図書館蔵)等の伶人側の史料、および高野山東京別院伝来の古絵図を総合して、史料が多く残されている江戸期の式次第を再構成し、声明と雅楽の関係を考察し、音響設計を分析した。

(4) 本研究で新たに収集した史料と『宝簡集』『続宝簡集』『又続宝簡集』『高野春秋』『紀伊続風土記』等に記載された関連史料、舞楽装束、舞楽面、楽器等の丹生都比売神社の伝来品等を総合して、鎌倉時代から江戸時代末期に至る天野社舞楽の史的展開の考察を行った。

4. 研究成果

(1) 江戸期の天野社舞楽曼荼羅供の空間配置および式次第の解明

史料調査によって、「天野舞楽曼荼羅供宝永之記」と題する江戸期の天野社舞楽曼荼羅供の詳しい式次第（実際には享保十一年の式次第）が善通寺に伝来していることが判明した。善通寺は、高野山や東寺になって、曼荼羅供を営んだようで、関連資料が数点伝来している。この「天野舞楽曼荼羅供宝永之記」を基本に、金剛峯寺伝来の七幅の荘厳図、「四天王寺楽人林家楽書類」（京都大学附属図書館蔵）、「楽所録」（国会図書館蔵）などの楽家の史料、東京別院伝来の古絵図などを総合して、空間配置や式次第を再構成した。その要点は以下のとおりである。

①空間

- ・集会所は山王堂、道場は本殿前の楼門に設けられた。
- ・舞楽の舞台は、道場となる楼門の前方に四間四方のものが仮設された。舞台の高さは常設の能舞台よりは少し高めに作られた。楽屋は舞台の前方に二つ設けられた。
- ・道場から外鳥居にかけて善綱が張られた。
- ・山王堂から舞台、楼門にかけての会場は、柵で仕切られた。
- ・職衆は二列で集会所前から出発し、太鼓橋、舞台を経て道場に向かった。
- ・導師の往還には輿を用いた。
- ・庭讃は、太鼓橋上で対面して唱えられた。
(池の中島には経蔵がある)
- ・職衆は、舞台を越えた道場前で群立し、道場に入る際には一定の所作があった。
- ・道場内の修法と舞台上の舞楽三番は同時進行で行われた。
- ・還列の讃は、讃頭が舞台上北端に至ったときに唱えられた。
- ・還列の際、職衆は舞台を越えたところで群立し、導師の輿が西のシオリ戸を過ぎると退散となった。
- ・神事の湯立、巫女神楽は、本殿と楼門の間の空間で行われた。

②次第

- ・法要に先立って、舞台上では露払いの田楽、次いで伶人による振鉦が行われた。

- ・導師や職衆の入場の際して、伶人が集会所の山王堂まで迎えに行き、山王堂前の讃机前で「一曲」を奏するのが享保度以降の慣例であった。

- ・導師、職衆の入場は、鏡鉦や法螺に加えて音楽で荘厳された（盤渉調、鳥向楽）が、音楽は太鼓橋上の庭讃の際には一旦停止した。
- ・導師が入堂し礼盤に上る際に、楽屋では音楽（盤渉調、白柱）が奏された。

- ・惣礼の際して、楽屋では音楽（盤渉調、千秋楽）が奏された。

- ・供花は、舞人二人が十弟子に花を渡した。
(江戸期の次第では迦陵頻、胡蝶など童舞は行われていない。)

- ・法要は密立の二箇法要で唄、散花、対揚（声明）が唱えられた。

- ・散花行道には伶人が堂内に進行し、奏楽（平調、慶雲楽）しつつ行道に加わった。ここでは散花（声明）と雅楽（慶雲楽）が共奏することになる。

- ・堂内の表白から中曲理趣三昧の間に、舞台上では舞楽三番が奏された。

- ・理趣三昧が終わり、合殺に移ると再び伶人が堂内に進行し、奏楽（平調、裏頭楽）しつつ行道に加わった。合殺も雅楽と共奏になる。

- ・合殺が終わり、後讃（声明）の後、導師は礼盤を下りたが、この際に、楽屋では音楽（盤渉調、越天楽）が奏された。

- ・導師が礼盤を下りると、舞台上では舞楽二番が奏された。この二番は導師のための舞楽と言われた。

- ・還列の際には讃（声明）が唱えられ、鏡鉦、法螺および音楽（太食調、長慶子）で荘厳された。

- ・翌日は能が行われた。

- ・当日の神事としては、本殿への神供献備、湯立、巫女神楽などが行われたが、これらは舞楽曼荼羅供の進行（次第）に関連付けられてはいなかった。（神事については、特別な次第や記録が見出せないことから、通常のものとの大差がなかった可能性が高い。）

- ・職衆は高野山の僧侶がつとめ、百二十口を例とした。

- ・伶人は京都方十人、南都方十人、天王寺方十人の合計三十人を例にした。

③演目

演目の具体例を掲げると寛政元年（1789）は次のとおりであった。

- ・演目

振鉦 一曲

万歳楽、賀殿、陵王、太平楽、打球楽（左舞）
延喜楽、長保楽、納曾利、狛杵、登天楽（右舞）

これらのなかで万歳楽、延喜楽、陵王、納曾利、太平楽、狛杵などは恒例となっていた

ようで、ほぼ毎回の記録に見られる。装束の華やかな太平楽は天野社舞楽の象徴的な舞と目されたためか『紀伊国名所図会』にも描かれている。舞楽装束は中世までとは異なり、江戸期には全て三方伶人が持参した（左方の装束は南都方、右方の装束は天王寺方の担当）。

なお、天野社舞楽で特徴的なのは、通常の舞楽で用いられる金属打楽器の鉦鼓が用いられなかったことである（その理由は不明であるが、道場と隣接するため磬などと紛れると法会の進行に支障が生じるからか）。しかし形を整えるために木製の鉦鼓縁のみは設置された。この鉦鼓縁は、丹生都比売神社伝来（和歌山県立博物館保管）の鉦鼓縁がそれにあたるものと思われる。

④声明と雅楽の関係

江戸期の天野社舞楽曼荼羅供における雅楽と声明の関係は、(A) 継時的関係の「庭讃」と「鳥向楽」、(B) 共時的関係の「惣礼」と「千秋楽」、「散花」と「慶雲楽」、「合殺」と「裏頭楽」、還列の「讃」と「長慶子」に大別される。このなかで「散花」と「慶雲楽」、「合殺」と「裏頭楽」の二曲は堂内の行道に伴い共奏されること、以前（惣礼まで）と以後（下礼盤）に盤渉調が採用されているのに対し、ここのみ平調に転調していることなどから取り分け注目に値する。そこで本研究ではこの音響設計の意図を解説するために、声明と雅楽曲の重なり具合を現行の音源で再現する実験を試みた。しかし必ずしも調和のとれた音響にはならず、その意図を読み取ることは困難であった。当初よりこうした音響設計であったのか、雅楽と高野山声明が接点をもたなくなった百七十余年の間にズレが生じたのか、にわかに決め難く、この点が今後の大きな課題となっている。

(2) 史的展開

天野社の舞楽の起源は、鎌倉時代に行勝上人が始めた一切経会にあるといわれるが、その後、舞楽が行われたことが確認できる最後の記録は天保十年（1839）である。本研究では、この六百余年の歴史を、下記の三つの時期に分ける試案を東洋音楽学会第 27 回定例研究会および丹生都比売神社史刊行記念シンポジウムで提示した。

第 1 期 鎌倉時代から室町時代中期

行勝上人の始めた一切経会からそれが一旦衰退する時期。

第 2 期 室町時代中期から江戸時代初期

一切経会を再興するものの再び衰退し、代わって遷宮の舞楽曼荼羅供が史料に頻繁に現れるようになる時期。

第 3 期 江戸時代初期から江戸時代末期

二十余年に一度の遷宮舞楽曼荼羅供が恒

例化し、三方伶人が出仕するようになる時期。以下に本研究で明らかにした三期の展開を略述する。

①第 1 期

第 1 期は行勝上人の一切経会に始まるが、一切経会がやがて金剛峰寺の年中行事の一環に取り入れられ定着する。「西南院本 正応四年金剛峰寺年中行事」によると、天野社一切経会は三月二十五日に行われ、引き続き天野社では法華八講が営まれた。これに先立って、正月十六日の山王院理趣三昧の日に、山上では「天野社舞童進奉」という行事があり、当年の舞童が集められ定められた。そして、およそ一ヶ月後の二月二十七、二十八日には、「天野舞童長校」という行事があり、舞童の長が決められた。この時期の伶人は、天王寺の伶人が関わっていたと考えられる。東京国立博物館に保管されている鎌倉時代の天野社の舞楽面の中に、「施入し奉る 右方楽頭大秦公合」という記載がみられ、この大秦公合は、他の史料から鎌倉時代末期の天王寺の伶人ということが判明しているからである。このように天王寺伶人が楽頭をつとめた鎌倉時代の後期は、天野社舞楽の最初の全盛期と思われる。この時期は文献史料には乏しいが、その盛行の一端は東京国立博物館保管の十面にもおよぶ舞楽面、和歌山県立博物館保管の三点の鼓胴（鼓の胴）などからうかがうことができる。

その後、南北朝期以降、天野社舞楽は衰退していった。そして室町時代初期の応永三十一年（1424）には「一切経会舞楽、既に十余年退転」（又続宝簡集）と記されるに至る。もっとも、この時期の舞楽の衰退は天野ばかりではなく、宮中や京都周辺の社寺にも同様の傾向がみられた。

②第 2 期

天野社舞楽の動向で、注目に値するのは、十五世紀前半の衰退期に着々と復興にむけた体制が整えられて行くことである。文安五年（1449）には、舞童の装束を京都の職人に注文する記録（続宝簡集）が残されており、享徳元年（1452）には一切経会舞楽が復興されるに至る。本研究ではこの復興を画期とし、以降を第 2 期とした。復興は、かなり大規模だったようで、この時期に詠えられた舞楽装束が、金剛峰寺等に数多く残されている。従来の天野社舞楽の研究がこれらの舞楽装束に偏っていたことは「1. 研究開始当初の背景」で記したとおりである。しかし復興されたものの一切経会を毎年行うのはやはり困難であったようで、一切経会はずぐに史料からは姿を消し、代わりに文明十六年（1484）の本殿の造営の折りの舞楽曼荼羅供を皮切りに、落慶や遷宮における舞楽曼荼羅供が定

期的に史料に現れるようになる。『高野春秋』等によると、この時期の舞楽は、やはり天王寺伶人の関与によるもので、舞楽は十双（二十演目）からなり、一切経会以来の伝統を受け継いで舞童が含まれていた。

さて、舞楽の歴史の上で、天野社舞楽の第2期は特に注目される。というのは、宮中の舞楽は十五世紀後半の応仁の乱以後、著しく衰退し、復興に向かうのは百年後の十六世紀後半のことであり、その復興の際に大きな役割を果たしたのは天王寺の伶人であったが、天野社の舞楽はこうした流れを先取りしているかのように、十五世紀中程に大規模に復興され、以降、宮中では舞楽が行えなかった時代にも、天王寺の伶人等によって十番にも及ぶ舞楽が定期的に行われていたからである。

③第3期

江戸時代になると、遷宮の舞楽曼荼羅供は一定の次第に整えられ、舞楽に出仕する伶人は全て宮中と同様の三方伶人の手に移るとともに、舞童は姿を消した。三方伶人の出仕以降を本研究では第3期とした。天野社で三方伶人が舞楽を行ったことが、史料上確認できるのは、寛文十三年（1673）からである（但し、その2回前から関与していた可能性がある）。この寛文十三年は、故実を確認して法要の様式を改めて整備するなど画期をなしたようで、関連資料が多く残されている。わけでも注目されるのは、この時に「莊嚴図」と呼ばれる絵図が作成されたことである。

「莊嚴図」は、舞楽曼荼羅供の故実継承のために、高野山の総意によって作成されたと考えられるものであり、御影堂に納められ管理された。その後「莊嚴図」は、享保十一年（1726）以降には、毎回新たに作成され、主として高野山僧侶が、楽人との関係や、天野社の会場の配置を確認する予行演習に用いたものと思われる。第3期はこの「莊嚴図」をはじめとして史料が数多く残されており、かなり細部まで当時の様子を知ることができる。その概要は、（1）に記したとおりである。なお、この時期の史料として特に注目される高野山東京別院伝来の古絵図について（4）に記す。第3期は天保十年（1839）を最後とする。

（3）永享七年越中集福寺の舞楽曼荼羅供の記録

十五世紀（第2期）の天野社舞楽の復興に深く関係すると考えられる、永享七年（1435）に成雄阿闍梨の行った越中集福寺の舞楽曼荼羅供の記録を発見したのは本研究における副産物の一である。成雄は宥快の弟子で、宥快とともに南山教学の確立に大きな足跡を残した学僧である。成雄の行った舞楽曼荼

羅供の記録は「成雄記」として伝来し、寛文十三年の天野社舞楽曼荼羅供（第3期）の式次第の再編に際しても参考にされたと考えられるものである。越中の集福寺は室町期の寺院そのものの実態すら不明で、そこで大規模な舞楽曼荼羅供が行われたことは、現在では全く忘却されている。当該史料は、演目はもとより出仕者が詳細に記されており、当該時期の地方の舞楽法要の実態を知る上でも貴重なものといえる。

なお、歌舞音曲禁止とされた高野山ではあったが舞楽法要に対する関心は常にもっていたようで、集福寺以外にも中世のものでは永徳元年（1381）の河内八尾常蓮寺（「常蓮寺供養記録 舞楽曼荼羅供」）、長祿四年（1460）河内小松寺（「舞楽曼荼羅供記」）等における舞楽曼荼羅供の記録、近世のものでは東寺における弘法大師遠忌の舞楽曼荼羅供の記録が数点伝来していることも本研究の調査によって判明した。

（4）高野山東京別院伝来の古絵図

標記の古絵図は、「高野山政所慈尊院図」「高野山壇場図」「高野山奥の院図」「高野山鎮守天野宮図」の四枚からなり、江戸時代の高野山学侶方江戸在番所に由来する高野山東京別院（東京都港区高輪）に伝来しているものである。紙本着色、1,8m×2,9mの大型の絵馬仕立て、昭和63年（1988）に現本堂が新築される以前は、本堂に掲げられていたという。それぞれに慈尊院、壇上伽藍、奥の院、天野社（舞楽の場面）とその周辺が描かれ、四枚を通覧することで高野山参詣の要所を一巡し追体験することができる構成になっている。本絵図は、関東における高野山信仰の展開に一定の役割を果たしたと思われるが、新本堂落慶以降は本堂に掲げられることはなくなり、倉庫にしまわれ、以後省みられなくなってしまっていた。本絵図は、港区教育委員会編『港区の文化財（第10集）高輪・白金』（1974年）に載せられ、次いで日野西真定編『高野山古絵図集成』（1983年）には写真が収録されているが、本書発刊以後も研究者の注意を引くことはなかったようで先行研究は見当たらない。本研究では、「高野山鎮守天野宮図」に舞楽の場面が描かれていることに注目し、2007年12月に調査撮影を行った。その後、描かれている事象を逐一検討し、2008年10月には古絵図に描かれている場所の比定と現況調査を行った。その結果、新たな知見をいくつか得ることができた。その概要は以下のとおりである。

①古絵図は周到な取材を経て作成されたと考えられること。

②壇上、奥の院のみならず、天野、慈尊院に至るまで、高野山参詣の要所が諸々の伝承を踏まえた上で網羅されており、『紀伊国名所

図会』に先行して、名所図会的性格を有していること。

③「高野山政所慈尊院図」に描かれた御幸の場面は、後宇多法皇の高野山御幸を描いたものであること。後宇多院の高野山御幸は山中雷雨にあったが、輿に乗らず徒歩で参詣したことで知られる（『正和二年後宇多院高野御幸記』）。図像化されたものは管見では他の例を知らない。

④「高野山壇場図」の中央に描かれた僧侶の行列は、二人の稚児が肩車されていることから金堂修正会に特定できること。二人の稚児は丹生、高野明神に擬せられ（明神の御装束）るもので、土を踏まないように肩車されている（『紀伊続風土記』に「御児二人禁踏載人肩」とある）。また、輿に乗った寺務は弘法大師に擬せられ、大師の御衣を着すとされる。

⑤「高野山鎮守天野宮図」に描かれている祭礼（含舞楽）は、江戸時代に天野社で行われた舞楽が遷宮の折りの舞楽曼荼羅供に限られることから、遷宮舞楽曼荼羅供に特定できる。

⑥「高野山鎮守天野宮図」の舞楽曼荼羅供の場面は、異時同図の技法によって最も華やかな場面を抽出して羅列したものと考えられること。絵図には、道場へ向う僧侶の行列、太鼓橋上での庭讃、仮設舞台上の二人の舞人と立奏する楽人、神供献備の様子、巫女舞を伴う神前神楽などが描かれている。しかし「天野舞楽曼荼羅供宝永之記」（善通寺蔵）等の式次第と照合させると、これと同じ時間帯を見いだすことはできない。なお、遷宮舞楽曼荼羅供における神事の実態は、当該絵図で初めて知られるようになった。

⑦古絵図の景観年代は、「高野山壇場図」に描かれた金堂が元文元年（1736）再建以降のものであること、宝暦十年（1760）再建の灌頂院が描かれていないことから、1736年～1760年に限定することができること。さらにその間に行われた天野社舞楽曼荼羅供は延享二年（1746）に限られるので、1746年以後のさほど下らない時期というのが製作年代の目安と考えられること。

⑧「高野山政所慈尊院図」の下方に橋本御殿（紀州藩の代官所）が描かれていること、「高野山奥之院図」には紀州徳川家の塔婆が明瞭に描かれていることから、製作に際しては紀州徳川家の関与が推測されること。

本絵図に関しては、東洋音楽学会第59回大会において口頭発表を行った。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計3件）

①遠藤徹、鳥谷部輝彦、前島美保、廣瀬千晃、三島暁子、高野山天野社の舞楽について（遠藤徹「天野社で行われた舞楽の概略」、鳥谷部輝彦「4つの本殿に描かれた舞絵について」、前島美保「宝物館蔵四幅の掛軸について」、廣瀬千晃「江戸期の天野社舞楽曼荼羅供の構成—『天野社舞楽曼荼羅供莊嚴図』（明和3年）を手掛かりに—」、三島暁子「高野山文書のなかの天野社舞楽資料」、東洋音楽学会東日本支部第27回定例研究会、2006.7.1、東京学芸大学、東洋音楽学会東日本支部だより、第12号、6頁～11頁（要旨）

②遠藤徹、清水淑子、前島美保、高野山東京別院伝来の古絵図と天野社遷宮舞楽曼荼羅供、東洋音楽学会第59回大会、2008.11.16、武蔵野音楽大学

③遠藤徹、天野社の舞楽について、丹生都比売神社史刊行記念シンポジウム、2009.3.28、高野山大学

〔図書〕（計1件）

①加瀬直弥、藤井弘章、高木徳郎、遠藤徹、伊藤信明、丹生都比売神社、丹生都比売神社史、2009、196頁～200頁（江戸時代の舞楽曼荼羅供）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠藤 徹 (ENDO TORU)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：10313280

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

廣瀬 千晃 (HIROSE CHIAKI)

国立歴史民俗博物館・歴史研究系・外来研究員

研究者番号：00413899

(4) 研究協力者

清水 淑子 (SHIMIZU YOSHIKO)

菅野 扶美 (SUGANO FUMI)

鳥谷 部輝彦 (TORIYABE TERUHIKO)

長沼 雅子 (NAGANUMA MASAKO)

前島 美保 (MAESHIMA MIHO)

三島 暁子 (MISHIMA AKIKO)